

寄稿

仏教の伝統と論書におけるヴァスバンドウの人物像

エレーナ・P・オストロフスカヤ

佐藤裕子 訳

※本稿は、ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所
刊行の定期刊行物『東洋の諸国と民族』第36巻
——東洋の宗教（モスクワ、ナウカ、二〇一五年、
三四二—三六一頁）*СТРАНЫ И НАРОДЫ ВОСТОКА*、
Вып. XXXVI, Религии на Востоке (Москва: Наука —
Восточная литература, 2015, сс. 342-361) に掲載され
た論文 E. П. Островская, Образ учителя Васубандху в
буддистской традиции и научном дискурсе. の邦訳であ
る。なお「」は邦訳に際しての補注であり、適宜、
見出しを付した。

〔要旨〕

本稿は、初期中世インドの高名な仏教僧の一人である

ヴァスバンドウ (Vasubandhu 世親) (四—五世紀) の哲学的実践の足跡研究の問題を扱う。彼の著作には、北部小乗 (*Hīnayāna*) 部派である毘婆沙師 (*Vābhāṣika*) と経量部 (*Sautrāntika*)、さらに大乘仏教 (*Mahāyāna*) の瑜伽行派 (*Yogācāra*) の見解を学術的に理解するための資料が豊富にある。中国とチベットで彼の思想がいかに形成され発展したのか——その諸段階を理解することで、これらの地域における仏教哲学・仏教思想の発展の特徴がわかる。本稿で筆者は、ヴァスバンドウに関する学術論争の重大なきっかけを示しつつ、ヴァスバンドウが大乘仏教へ転向した時期について、彼の伝記を修正し得るような新たな研究成果に着目する。キーワード：初期中世インドの仏教哲学、毘婆沙師、ヴァスバンドウ、瑜伽行派、大乘、経量部、北部小乗

はじめに

初期中世インドの傑出した思想家の一人である法師ヴァスバンドゥは、とりわけ中央アジアと東アジア諸国で尊崇される高名な啓蒙思想家として、今日の仏教伝統のなかに姿を現している。彼の著作は幾世紀も前にサンスクリット語から中国語・チベット語・日本語に翻訳され、インド半島を超えた地域で多くの註釈書が生まれ、今日でもそれが仏教僧向けの高等教育の学習科目に盛り込まれている。

ヴァスバンドゥに対する学術的関心は二十世紀初頭に起こったが、それは、宗教思想・宗教哲学を⁽¹⁾発展させてきた多様な学派における文化史上の現象を⁽²⁾仏教研究の対象とすることが、仏教の分野で前面に押し出された時期であった。それ以来、ヴァスバンドゥという名前で著述された諸テキストは、⁽³⁾歴史哲学的に優れた名著でありながら、その思想内容があまりにも多岐にわたるために学術論争的⁽⁴⁾となってきた。強調すべきは、そのテキストが、ヴァスバンドゥ本人の著作に

仮に同じ名前を冠した別人が書き加えた創作物だとして、その理論的立場が根本的に変わってくるという点である。

ヴァスバンドゥが論じた二大小乗派と 瑜伽行派

大部分分量をもつヴァスバンドゥの著作は、北部小乗部派⁽⁴⁾の思想体系と結びついている。その部派とは、三蔵の中の第三部である論蔵、すなわち阿毘達磨(アビダルマ、Abhidharma)⁽⁶⁾の教説をめぐる論争の過程で歴史的に形成された、毘婆沙師および経量部のことである。この二大部派についてヴァスバンドゥが論じた総合的な主要書である『阿毘達磨俱舍論』(Abhidharmakośakāra)と、それを自ら註釈した『阿毘達磨俱舍論釈』(Abhidharmakośabhāṣya)によって、彼は傑出した思想家としての名を一躍高めたが、この二書が極めて相反する関係にあることは注目に値する。第一の論書には、首尾一貫して説一切有部(Sarvāstivādin)の毘婆沙師の見解がまとめられている。

ちなみに、これは厳格なカシミール有部に属する。第二の註釈書では、この毘婆沙師の体系で最重要とされる概念規定の多くが、経量部の立場からの抜本的批判を受けている。

ヴァスバンドゥが自ら論じたこれらの書の中では、唯識派 (*Vijñānavāda*) が典拠として築いた唯識の教学が四つの小品に明確に分けられている。すなわち、『大乘成業論』 (*Karmasiddhiprakaraṇa*)、『唯識二十論』 (*Viniścatkāvijñāpimāratāsiddhi*)、『唯識三十頌』 (*Triṃśatikāvijñāpimāratā*)、『三性論』 (*Trisvabhāva-niddeśa*) である。これらの論書の中で記された概念は、アサンガ (*Asaṅga* 無著、四世紀) が創始した大乘仏教の瑜伽行派の哲学的見解の教義上の核心となった。

「唯識派」という用語は、この瑜伽行派の第二の名称として使われ始め、ヴァスバンドゥは、あたかも実兄である無著⁽⁷⁾とともにこの部派を創始したかような存在として有名になった。

毘婆沙師、説一切有部

ヴァスバンドゥの哲学的実践を文化史的文脈から解明するためには、ヴァスバンドゥが自身で展開した論説の視点で、彼の所属部派について簡潔に説明する必要がある。毘婆沙師は当初から説一切有部と呼ばれていた。この名称は、阿毘達磨の中の教説が文書〔註釈書〕として記録された時に現れた。この部派は、阿毘達磨に関する主要問題の研鑽の指導的立場を務めた。それは、認識、感情・感性、活動⁽⁸⁾など、生きとし生けるものの個々の経験を絶えず構成する要素としてのダルマの理論を扱う。説一切有部は、過去・未来・現在の三世にわたって見られる自性 (*svabhāva*) と独自の特徴 (*svataksanā*) をもった客観的な本質として、あらゆる宇宙の法と秩序が実存するという命題を、自らの基本思想のなかに掲げた。

説一切有部は、この教義をより詳細に研究していく過程で、既存の經典の解釈に対して批評的な立場をとった。この姿勢によれば、釈迦牟尼仏の教説を文字通りに理解することも、論書的な分析方法を使うこと

も必要ない。なぜなら、教主の言葉はただ「意味に導く」ことだけを目的としており、つまり、それを会得できる能力のある聴衆だけに説かれていると考えられたからである。釈迦牟尼の崇高な説法を理論的に理解するためには、「要約」(yibhāsa)「された論説」について討論し、その註釈を入れる過程で形成された特別な解釈法を用いる必要があった。ここから、この部派の第二の名称である「毘婆沙師」(Vibhāsika)の根拠が見えてくる。

説一切有部の中心地となったのがカシミール国である。ここでは、一世紀から二世紀にかけて膨大な量(の論説)がまとめられ、註釈書として『阿毘達磨大毘婆沙論』(以下、『大毘婆沙論』と表記⁹⁾)が作成された。共同作成によって生まれたこの註釈書には、「譬喩者」(darsianika)¹⁰⁾を含む初期仏教部派のそれぞれの立場が反映された。「譬喩者」はその後、經典を重んじそれを基準(量)とする部派と見なされ、第二の名称である「經量部」(Saurāṅika)として有名になった。

譬喩者、經量部

譬喩者の起源に関してはあまり知られていない。その祖師はクマラーラータ [Kumārata 鳩摩羅駄]とされるが、彼の生涯は明らかになっていない。この部派の僧たちは、説一切有部と違い、仏陀の教説や教訓の解釈の問題に関して阿毘達磨の論説の權威を退けることはなかったが、その宗教的地位は認めなかった。

經量部は、独自の哲学体系を完成するまでには至らなかった。彼らの実証的・理論的見解を収録した文献は、今日までやはり見つかってはいない。しかし彼らは、律(Vinaya)を構成する『ジャータカ(本生譚)』と『アヴァダーナ文献(譬喩譚)』といった、教訓的で興味深い物語の經典や例証をもとに判断することを主張し、説一切有部に抗論してきた。それに対し説一切有部は、教主はさまざまな教養水準の衆生が集まる場で、衆生の理解力に表現方法を合わせながら、自身の説法や教訓を述べていたという状況を經量部に対し示した。同様に、經典や『ジャータカ』、『アヴァダーナ文献』は、法(ダルマ)の理論的な議論のために作

られたのではなく、教主の教えは、阿毘達磨の論説の中でだけ厳格な解釈が許されると指摘した。

経量部が派生した時代に、実際には第二の名称である「譬喩者」のままで通っていたのではないだろうか。ヴァスバンドウの『阿毘達磨俱舍論』の分析を論拠とする現代の研究者は、次のようなきわめて興味深い事実を示している。すなわち、カシミール有部の主張に対する経量部からの批判が、『阿毘達磨俱舍論釈』で十九項目挙げられているが、譬喩者の主張もまた二度反証を受けているというのだ。⁽¹¹⁾別の言葉で言うくと、ヴァスバンドウは経量部と譬喩者を同一視せず、譬喩者にはまったく賛同していなかったのである。

言及すべきは、『阿毘達磨俱舍論』がカシミール有部側から猛烈な反駁を呼び起こしたという点である。説一切有部の擁護者であるサンガバドラ〔Sanghabhādra 衆賢〕は、ヴァスバンドウの著作に對する答弁として挑戦的な論書である『阿毘達磨順正理論』(Abhidhamanyāyansūtrī)を著し、またある無名の著者は『阿毘達磨俱舍論釈』への反論

に向けられた批判的な論書である『阿毘達磨燈論』(Abhidhamadīpa、「阿毘達磨の灯」という意)を発表している。

一九八〇年代後半から続いていた経量部に関する学術的論争では、『阿毘達磨俱舍論』の出現までは、「経量部」という用語が、サンスクリット語の原典の中で深く研究・考察されていないとの結論に達した。⁽¹²⁾経量部の特徴をもつ『阿毘達磨俱舍論』が成立した時代に、経典だけでなく、大乘の経典とりわけ『解深密經』(Saṃdhirimocana Sūtra)の模倣(踏襲)も認められていたと提議する可能性は十分にあった。

瑜伽行派

『解深密經』は、瑜伽(Yoga)を実践する部派である瑜伽行派の思想的慣例の形成過程で基礎となった教義上のテキストである。この部派の名称は『瑜伽師地論』(Yogācārahīni)に起源をもつとされている。『瑜伽師地論』の宗教的儀式の由来は、法師アサンガの作とされる聖者伝で伝えられている。その伝記によれ

ば、アサンガは未来仏⁽¹⁴⁾であるマイトレヤ [Maiteya 弥勒菩薩] から直接この論の原典を手に入れた。

現代の史学史家たちは、この原典の中に記されたマイトレヤ、あるいはマイトレヤナータ [Maiteyanātha 弥勒] の名は、アサンガを長年の禁欲的実修に導いた、実存の遁世者の名の可能性もあったと推定している。そのため、多くの学術書の中で、マイトレヤとアサンガの名前が『瑜伽師地論』の共著者として併記されているとある。この経論は、菩薩道を選択した大乘仏教の苦行者が遵守すべき修行の教義を説き、瑜伽行派のプラクシオロジ (praxeology、先験的・超越論的演繹) の基礎となった。

唯識派のために書かれたヴァスバンドゥの論説は、瑜伽行派のプラクシオロジの範疇に入る哲学的基礎の役割を果たしていた。ある概念は、ヴァスバンドゥの論説の中に自身の論理的具現化を見出した。その概念に従えば、現実を理解するための唯一の方法として浮上するのが一大表象である認識行為 (vijñāpimāna)、つまり唯識、観念である。一方、説一切有部が所依

とする『大毘婆沙論』の編纂者たちが實在の本性とみなしていた他のすべてのダルマは、唯識派の観点から、有名無実な分析単位を超えるものでなく、空 (śūnyatā)、つまりどのような利己主義も有さないものとして存在している。

年代学の見地では、唯識派、経量部、瑜伽行派と関係する法師ヴァスバンドゥの哲学的実践の諸段階はどのようにして区分されるのだろうか。どのような要因によって、彼は自らの思想をさらに発展させようとしたのだろうか。

こうした問いに答えてくれるような、信頼できる学術的な証拠資料は見あたらない。そもそも、ヴァスバンドゥが生きていた年代すら推定するのに論争が起きているのだ。古代および中世初期のインドの思想家、学者、文学者たちのことは、伝承からしかわからないため、このような「ヴァスバンドゥの年代が不明な」状況は何ら特別なことではない。卓越した人物に起きた具体的な歴史的現象を再現しようとしても、時に解決できないことがある。なぜなら、何世紀にもわたって

〔受け継がれた〕インドの文献遺産ともいえる年代記には、文化的・精神的な社会生活の諸相に関しては、歴史編纂学分野の著作が報告されないためである。仏教の聖人に関する情報を探る中で研究者が注目するのは、中国およびチベットにおける聖者伝や巡礼記、仏教の伝統的な歴史編纂学分野の著作が記述された史料なのである。

中国の口碑に、ある仏教伝説が残されている。この伝説によれば、ヴァスバンドゥに関する最初の聖者伝は、中国仏教文献を見事に翻訳し中観派 (*Madhyanika*) 思想を広めたクマールージーヴァ (*Kumarajiva* 鳩摩羅什、四世紀中葉―五世紀初頭) により編纂された。しかしながら、その著作は現在に至るまで見つかっていない。聖者伝の著作にきわめて重要な貢献を果たしたのが、瑜伽行派の「教えを」最も積極的に布教したパラマールタ (*Paramārtha* 真諦、四九九―五六九年)⁽¹⁶⁾、そして玄奘三蔵 (*Xuanzang*⁽¹⁶⁾、六〇二―六六四年) と彼の門弟たちである。

パラマールタによる『婆藪槃豆法師傳』

『阿毘達磨俱舍論釈』を中国語に初めて翻訳したとされるパラマールタの名前は、『婆藪槃豆法師傳』、つまり『法師傳』の登場と結びついている。パラマールタは自身をこの伝記の翻訳者として記しているが、おそらく彼はこの伝記の編者でもあったのだろう。〔ただ〕この伝記に関する資料はどこにもない。この伝記はほぼ確実にガンダーラ国やカシミール国で伝えられた口碑に拠っており、パラマールタが訳経修学時代に仏教修学の二つの中心地を訪れた際に、そのことを耳にしたのだ〔と考えられる〕。

この『法師傳』が筋書きの構成をもっている点は特筆する必要がある。それは、とりわけプトン・リンチェン・ドゥブ (*Buston Rin-chen Grub* 一二九〇―一三六四年) の『インド・チベット仏教史』⁽¹⁷⁾ やターラナータ (*Tāranātha* 一五七五―一六三四年) の『インド仏教史』⁽¹⁸⁾ といった、「ヴァスバンドゥの生涯を伝えた」チベット人による仏教史の史伝や年代記といった史料の

中でずっと後に再構成されたものである。しかし、事実を記述しているかどうかについては、パラマールタの『法師傳』やこれらチベット人の史料の間に一部違いが生じている。

『法師傳』の名は、阿毘達磨部派文献の日本の著名な研究者である高楠順次郎によつて、西洋の学界で知られるようになった。高楠は、『婆藪槃豆法師傳』の英訳本を一九〇四年に出版した。⁽¹⁹⁾ その一年後には、世親の生涯の年代を特定する問題を扱った研究論文を発表した。⁽²⁰⁾ 高楠は、ヴァスバンドウの年代を四二〇年から五〇〇年の間の時代としたが、この仮説が、(今日まで)すでに百年以上続く学術的な議論のきっかけとなった。

ブルシャプラからアヨーディヤー国へ…

サーンキヤ派との対立

『法師傳』によれば、ヴァスバンドウはインド半島の最北西部に位置するガンダーラ国のブルシャプラ(現在のパキスタンのペシャール)で生まれた。彼の

両親は、特権的な地位のバラモン階層の出身であった。僧侶の父親はカウシカ氏族(*gaurā*)⁽²¹⁾の一員であり、宮廷の祭司であるプローヒタ(*Purohita*)という最高位を得た。聖者伝によれば、母親はヴィリンチという名であった。

系譜学の面で重要な役割を果たしているのが、「ヴァスバンドウ」という名に関する情報である。この名は、この伝記の主人公(いわゆる世親法師)だけでなく、彼の実の二人の兄弟にも生まれた時に付けられたようだ。後に弟は自身をヴィリンチの息子「ヴィリンチヴァッサ」と名付け、兄は大乗仏教の師アサンガとして有名になった。

瑜伽行派の開祖であるアサンガとヴァスバンドウを、血縁関係のある兄弟として結び付けたこの『法師傳』は、『阿毘達磨俱舍論』の著者(であるヴァスバンドウ)がどの方向に見解を展開したのかを描きながら、中国とチベットの仏教史学のなかにしっかりと根付いたのである。

『法師傳』によれば、未来の啓蒙家(となるヴァスバ

ンドウ」は、グプタ王朝時代に、文化的生活の隆盛を極めた中心地アヨーディヤール国で、仏教の修行の道に入った。さまざまな思想をもったグループの代表による哲学の公開討論が国王の宮廷でも行われ、その勝者には十分な褒賞金が与えられた。アヨーディヤール国では説一切有部の僧団が大きな影響力をもつようになり、若きヴァスバンドウはその一員となった。彼は、毘婆沙師で博識で知られたブッダミトラ (Buddhamitra 仏陀密多羅) に師事して、見事に阿毘達磨を習得する。ヴァスバンドウは、経量部の論者や、マノーラタ (Manoratha 摩拏羅) (の指導) により仏教の知識を得た他のすぐれた碩学たちとも関係を保っていた。

『法師傳』では、ヴァスバンドウの著とされる『七十眞實論』(Paramathasaptatika) の登場と、彼がブッダミトラのもとで修学した時期につながっている。「最高の眞實に関する七十品」を収めたこの論書を通して、バラモンの哲学体系であるサーンキヤ論 (Sankhya) が批判され、カシミールの毘婆沙師が論理的に優位であることが示された。

強調すべきは、中世初期時代のサーンキヤ学派の信奉者たちは、この関係のなかで、公開討論の場で仏教の師に対抗しながら、彼らを妥協なく批判する者だと自ら表明した点である。まさにこのような文脈で、『法師傳』は『七十眞實論』の成立の歴史を物語っている。『法師傳』によれば、サーンキヤ学派を本質から革新し、『サーンキヤ論(数論学)』(Sankhya-sastra) を著したことで知られるヴィンドヤヴァーシン (Vindhyaśāstra 頻闍訶婆娑)⁽²⁴⁾ が、アヨーディヤール国に討論のために赴いた。ヴァスバンドウとマノーラタが不在であったため、彼の呼びかけを受けたのはブッダミトラであった。すでにかなり高齢だったこの仏教の師はこの討論で敗北を喫し、王の褒賞金(三ラーク)はヴィンドヤヴァーシンのもとに渡った。

衆目のなかでの師の屈辱を知ったヴァスバンドウは、知的な討論で勝ち誇ったサーンキヤ学派と戦い仇を討とうと強く思うようになった。しかしまもなく、ヴィンドヤヴァーシンは生まれ故郷へ戻る道中で死去したことが明らかとなった。それは、ヴァスバンドウ

が『教論学』の論破のための『七十眞實論』の著述に着手した頃であった。伝記の情報によれば、ダルマの擁護者としてのヴァスバンドウのこの功績は国家に認められ、以前ヴィンドヤヴァーシンに贈られたのと全く同じ褒賞がヴァスバンドウに授与された。

思想の発展段階①

ヴァスバンドウの思想的発展の最初の段階は、伝記の中のカシミールでの彼の修学時代について書かれた箇所でも明かされる。経量部の側からの分析的な批判を浴びた説一切有部の厄介な抽象論は、時とともにヴァスバンドウの中に大きな疑念を呼び起こし始めた。これを増長させたのが、経験豊かな論客であるマヌラータとの交流であった。ヴァスバンドウは、説一切有部の立場に移る前に、最終的には、阿毘達磨の伝統を厳格に保持してきたカシミール有部の師に直接指導を受け、『大毘婆沙論』(Mahāvīhāsa)を新たに研究することを望んだ。ヴァスバンドウは偽名でカシミールに出向き、異国の僧院の一つに学生として入学することを

決意した。

彼は四年にわたって偽名で修学したが、『入菩提行論』(Bodhicaryavatara)の著者であるシャーンティデーヴァ [Śāntideva 寂天] が主導する僧院で行われた。伝記の記述によれば、この僧院の修行僧の一人が、『阿毘達磨俱舍論』をその後批判することになるサンガバドラであった。

ヴァスバンドウは、カシミール国の僧院を卒業する前に、僧院を早い時期に去るのだが、その原因は、彼の非凡な行動にあった。この偽名の学生は、『大毘婆沙論』の擁護者たちを袋小路に追いやるような質問を提示し、サンガバドラと絶え間なく論争を行い、他の学生たちを苛立たせた。僧院の中でヴァスバンドウに対する敵意が増大につれ、シャーンティデーヴァに極度の不安が生まれた。シャーンティデーヴァは深く集中した状態に沈潜することで、手の焼く学生だったヴァスバンドウの仮面の中に非常に才能豊かであった成熟したガンダーラ国出身の思想家の顔が隠れており、ヴァスバンドウが本気で論証を示し、カシミール

国の毘婆沙師を批判にさらすつもりでいたことを見抜いた。

シャーンティデーヴァはヴァスバンドゥを懇談の席に呼び出し、粗野で不作法な学生側からのあからさまな攻撃を受ける前に、故郷へ帰るよう助言した。ヴァスバンドゥはこの助言に従った。なぜならヴァスバンドゥは、僧院での滞在期間にカシミールの学匠たちの体系のなかで形成された概念が、ダルマの深い意味と合致しないことを完全に確信していたからである。

ここで次のような疑問が生じる。カシミール国の毘婆沙師にすでに失望した思想家が、何のために哲学偈頌『阿毘達磨俱舍論』を編み、この体系の諸相を洗練された綴りで美しく表現することを自身に課したのだろうか。

伝記によれば、ヴァスバンドゥはカシミールを去った後にプルシャプラに住みつき、聖人としての活動場所をそこに移した。今の疑問に対する答えは、文脈上この移動に関係している。プルシャプラは『大毘婆沙論』の中で何度も登場する譬喩者のダルマトラー

タ (Bhadanta Dharmatara 達磨多羅大徳、二世紀) の故郷であり、初期中世インドでは経量部の砦として有名であった。カシミール国の学匠たちは、正統派の説一切有部の「真の理解」をもって、遠く隔たった高みからガンダーラ国の阿毘達磨の学者たちを見下ろしていた。カシミールの教義の論破を目論んだヴァスバンドゥは、その哲学的構造を自身が最初に完璧に習得したことを証明する必要があった。というのも、学術的な公開討論の規定によれば、反駁する論題を的確に提示する能力のない対論者は注目に値しなかったからである。

ヴァスバンドゥは、プルシャプラの中心地に位置していた小さな個人宅に好んで居を構え、どの僧院の共同体にも加わりとうしなかつた。彼は生活を維持するために、カシミールの説一切有部が説く阿毘達磨の分析・解説について公開のかたちで講義し、啓蒙活動を行う道を選んだ。彼は、叙述された論の内容を具体的な主題に沿って偈頌のかたちで要約して毎回の講義を終えた。

その結果、説一切有部の教義を広義に註釈してほしいとの要求があり、その大部分の哲学的体系を、六百の偈頌で優美に表すことになった。この時代の教養あるインド人にとっては、仏教僧院が所蔵する程度の偈の経句を、耳で聞いて暗唱することは難しいことではなかった。⁽²⁵⁾

『法師傳』では、ヴァスバンドゥがカシミール国に論書の写本を送ったと伝えている。シャーンティデーヴァと彼の仲間は、正統派の説一切有部が理想的とする著作だと認めた。「ただ」文中で見かける「このように論証されている」「と言われている」といった推論的備考については、彼らをいくぶん警戒させた。「いずれにしても」ヴァスバンドゥは承認を得たことで、批判的な著作として『阿毘達磨俱舍論積』の編集を自由に行えることになったのだ。

『法師傳』によれば、多くのカシミール国の学者が、ヴァスバンドゥに対して彼の論書の註釈書を作成してほしいと要求した。なぜなら、『阿毘達磨俱舍論』の金言が簡潔過ぎたため、説明を必要としたからであ

る。しかし、カシミール国の学者はこのプルシャプラ出身の碩学の新しい著作について知ったとたん、憤慨した。時間の三様態すべての中に真実の本質としてのダルマが存在するとした説一切有部の基本的な教義が、実に見事に反証された。それにより、説一切有部は、的確な論理・論拠を見つけて擁護することがきわめて重要な課題であることに気づいた。善いカルマや悪いカルマの結果を形成する過程に現われない物質的な形而下の要素の役割に関して、カシミールの思想家たちの概念は有効ではないと見なされた。その概念に對抗して、立派な、あるいは不道德な行為を完遂する瞬間に行為者の先験的な未来を形作るような、「因果具時」に関する命題が提起された。説一切有部のその他のたいへん重要な一連の教義も、同様のかたちで深刻に揺るがされたのである。

ヴァスバンドゥは、正統派の説一切有部がとくに嫌った経量部の立場から『阿毘達磨俱舍論積』の中で批判を広範にわたって記述した。説一切有部はヴァスバンドゥを転向者と宣告し、サンガバドラはヴァスバ

ンドウの著述に乱暴な罵声を浴びせた。

思想の発展段階②

ヴァスバンドウの思想的発展の第二段階は、アサンガがヴァスバンドウの大乗仏教への転向について叙述した伝記の中に見られる。伝記によれば、ヴァスバンドウが自ら『阿毘達磨俱舍論』への註釈書を完成させた後、彼は巡礼しながら学匠の生活を送った。国王や宮廷の上流階級にダルマについて講義していたアヨーディヤー国での滞在期間に、彼は『瑜伽師地論』を知る機会を得た。その原文はヴァスバンドウにとつて冗長で難解に思えたが、彼自身の視点で機知に富んだ批評が与えられたのだ。

プルシヤプラで弟子と暮らしていたアサンガはこのことを知り、弟を大乗仏教に向かわせる時が来たことと決断した。彼は二人の門弟をアヨーディヤー国に送り、空や、日常的な言葉で「個人」(Pudgala)と称されるものや、ダルマの自性 (svabhava) に関する大乗仏教の教義である「中観派」⁽²⁶⁾の基本理論が書かれた『無盡

意菩薩品』(Aksyamatinidesasutra) をヴァスバンドウに読誦させるように命じた。⁽²⁷⁾

この経を傾聴したヴァスバンドウは、この教えが論理的見地から完全に論証されたことを認めた。しかしそれと同時に、彼は経文を見て、空観 (sunyata) に達するための観照という実践方法が何も提示されていないことがわかった。そして、アサンガが空を直覚しようと熱心に試み、長年にわたり隠遁生活を送ったことを思い出し、このことを率直に表明した。

兄アサンガは、『十地経』(観照の十段階に関する説教)の読経のために再び使者をヴァスバンドウのもとに送った。今回ようやく、アサンガの門弟たちは最終的にヴァスバンドウを説得することができた。大乗仏教の実践的方法が深く論証されたことを、ヴァスバンドウは確認したのである。彼は間もなくアサンガのもとを訪れ、長時間にわたる対話を通じ、兄弟ともに完全に同じ考えに到達したのである。

ヴァスバンドウの大乗仏教への転向後、彼が最初に作成したのが、彼の註釈論書である『無盡

意菩薩示教』(Aksyamahiradesajika)と『十地経論』(Dasabhumivyākhyana)であった。そのずっと後になって、ヴァスバンドゥは唯識派の叙述に充てて独創的な論書を生み出し、大乘仏教の偉大な師として有名になった。伝記によれば、彼はアヨーディヤー国で人生の幕を閉じている。

ヴァスバンドゥ以後

伝記には、師匠ヴァスバンドゥの教えを継承し独自の道を拓いた、卓越した四人の弟子の名が挙げられている。それは、唯識派の救済論的見解を發展させた初期仏教の諸学派の碩学であるステイラマティ(Schriahati 安慧)、般若経⁽²⁸⁾の理論家であるヴィムクティセーナ〔Vimuktisena 解脱軍〕、唯識派の註釈者であり理論家のグナマティ〔Guananti 德慧〕、唯識派の論理学を確立したディグナーガ〔Dignāga 陳那⁽²⁹⁾〕である。強調すべきは、中国で『婆薮槃豆法師傳』が登場したのと同じ時代に、カシミール国の毘婆沙師からバラマールタ(眞諦)により布教される瑜伽行派の異なる

見解が見られ、説一切有部が根付く現象が起こった点である。バラマールタはヴァスバンドゥの大著である『阿毘達磨俱舍論』を本来のまま残し、『阿毘達磨俱舍論釈』を漢訳した。おそらくバラマールタは、中国のダルマの擁護者たちが、この論書に記述された説一切有部への批判に猛烈に関心があつたのだろう。バラマールタは『法師傳』の中で、ヴァスバンドゥが完全に習得した説一切有部の教えに知的な物足りなさを感じ、そこから反射的に距離を置いた段階と、大乘仏教への転向に先立つ段階としてヴァスバンドゥ自身が註釈書を編纂した軌跡を説いた。

中国におけるヴァスバンドゥ

玄奘三蔵が巡礼者としてインドを訪れたずっと後の七世紀には、ヴァスバンドゥに関する伝記はもはや大乘仏教の擁護者としての伝記の性格を帯びていた。中国の旅行者〔すなわち玄奘〕の旅行記の中の書き込みが、そのことを証明している。玄奘は、ブルシャプラでヴァスバンドゥが『阿毘達磨俱舍論』⁽³⁰⁾の著述に従事

したときに生活した覚書の一覧表が残された家や、ア
ヨーディヤール国で王朝の名士たち⁽³¹⁾の前でヴァスバン
ドゥが大乗仏教の説教を行った大広間を見ることがで
きたと記載した。カシミール国で玄奘は、『阿毘達磨
俱舍論』とサンガバドラの『阿毘達磨順正理論』の読
経を聴き、双方の著書の研究が、唯識派⁽³²⁾における諸問
題の流れを理解するために絶対に必要であると確信し
たのである。

玄奘がインドから持ち帰った写本の中に入ってい
たのが、『解深密経』と『瑜伽師地論』⁽³³⁾の古書であつ
た。中国の碩学であつた玄奘は、これらの原書を研
究し、瑜伽行派とカシミール国の阿毘達磨僧たち
(Abhidharmika)との相互関係を自身で完全に理解した
いと強く思っていた。玄奘と門弟の一団は故郷へ帰る
途上で、これら二冊の古書を漢訳し、同様に『阿毘達
磨俱舍論』と『阿毘達磨俱舍論釈』の翻訳も果たし
た。漢訳には、玄奘が構築した、サンスクリット語の
専門用語を統一して翻訳するという新たな原則を基本
に置いた。⁽³⁴⁾

玄奘の門弟である普光と法實は、ヴァスバンドゥの
『阿毘達磨俱舍論』とその註釈書の作成の軌跡に、意
味の深い革新的な見方を持ち込んだ。この新たな所見
は、ヴァスバンドゥは最初から経量部の立場をとって
いたために、カシミール国の毘婆沙師への酷評を企て
たというものである。しかし最良の方法で酷評する
ために、彼はすでに持っていた知識に甘んじることな
く、カシミールの学者たちの考え方をより深く詳細に
学ぶ必要があると考えた。まさにこのことが、カシ
ミール国で修学をヴァスバンドゥにさせた原因であつ
たという。⁽³⁵⁾

この所見は、七世紀の中国の瑜伽行派研究者たち
が、毘婆沙師の根本聖典や註釈書、とりわけ『大毘婆
沙論』(の作成)を唯識派の立場へと昇華するために
不可欠な段階だと見なしていたという証しである。

チベットにおけるヴァスバンドゥ

チベット仏教の伝統では、世親の論述や翻訳が、哲
学的言説⁽³⁶⁾が発展するなかでのきわめて重要な要素と

なつた。啓蒙者であるヴァスバンドゥは、ナーガール
ジユナ〔Nāgarjuna 龍樹〕、アーリヤデーヴァ〔Āryadeva
提婆〕、アサンガ、ディグナーガ、ダルマキールティ
〔Dharmakīrti 法称〕と並んで仏教思想の「六つの宝」の
一人に数えられた。

チベットの仏教史では、アサンガとヴァスバンドゥ
の兄弟に関する物語は分ち難いものとして叙述され
ており、特別な弁証学的性質を帯びている。プトンに
よれば、アサンガはヴァスバンドゥの実の兄ではな
く、彼らの母親がクシヤトリヤの父との最初の結婚で
誕生した異父兄であつた。⁽³⁷⁾ ヴァスバンドゥの父親はバ
ラモンであつた。プトンは、パラマールタの著述とは
別に、ヴァスバンドゥの母親の名をプラサンナシユ
ラとしているが、アサンガとヴァスバンドゥの父親た
ちの名前に関しては何も伝えていない。この歴史家の
言葉によれば、この母親の言葉が、僧院生活を選択し
た息子たちの精神的道程を決定するのに極めて重要で
あつた。

この筋書きはターラナータの作でも同様に叙述され

ており、母親がプラカシヤシラと称されていたことが
唯一違う点である。ターラナータは、アサンガとヴァ
スバンドゥの間に明確な年齢差があつたことを伝えて
いる。すなわちアサンガが二十歳で僧院生活に入り、
僧侶となつた翌年に、弟が誕生したとある。⁽³⁸⁾

このように、二人の歴史家がカシミール国でのヴァ
スバンドゥの修学時代について語っているが、そのこ
とと彼の『阿毘達磨俱舍論』とそれに対する註釈書の
作成の状況は何ら関係ない。これらの語りでは、サン
ガバドラが世親の門弟ではなく、博學な学者である学
派の指導者とともに登場する。講義したとされる『大
毘婆沙論』には触れられていない。ターラナータに
よれば、ヴァスバンドゥは經典や律、論書〔Vihāsa〕
や初期仏教の諸学派の見解、同様に外道の（つまり非
仏教的）六種の思想体系といった類の原文を修学して
いった。

ヴァスバンドゥが大乗仏教に転向した筋書きは、パ
ラマールタの伝記と同様、二人の歴史家により叙述さ
れている。しかし、パラマールタによるチベット語の

論説では、アサンガがクシャトリヤの父から誕生したという異なった点が示され、それが思想上の明確な役割を果たしている。この点により、王族・武士階級出身者である釈迦牟尼仏とアサンガが少し近づいていく。バラモン階級の生まれだったヴァスバンドゥは、クシャトリヤ出身の異父兄の導きによって大乘仏教の信奉者となり、瑜伽行唯識学派の卓越した理論家として名声を得た。このような伝記の筋書きの構成から、理論的思弁の頂点に唯識派を押し上げたチベット仏教の中心思想を容易に推量できる。

ターラナータの伝記の中で一点、ヴァスバンドゥが、神秘主義の祈祷の定型句であるマントラ (Mantra) や呪文のダーラニー (dharani)⁽³⁹⁾ の吟唱を仏教のタントラ (聖なる秘密の教え) の領域で実践していたことを付け加えたい。このことを語りながら、歴史学者ターラナータは、もともとインドにあったと思われる史料を引用している。ヴァスバンドゥのタントラ実践に関する叙述は、とくにチベットにおけるヴァスバンドゥの人物像を示している。タントラは非常に早

い時代からチベットに根付き、かつ仏教の信仰生活を送るといふ最高の目標を達成するための最速で効果的な方法として注目され、人気を博した。

西洋におけるヴァスバンドゥの人物像

ここで、西洋の学界で形成されてきたヴァスバンドゥの人物像に目を向けてみたい。一九一〇年代、アカデミー会員のF・I・シチエルバツキーの主導で『阿毘達磨俱舍論釈』を学術的に活用しようとする国際的プロジェクトの研究が始まった。そこから、仏教学者の中でヴァスバンドゥの哲学的活動の年代を解明しようとする気運が芽生えた。⁽⁴⁰⁾一九一一年、フランス人学者のN・ペリーにより、ヴァスバンドゥの年代は高楠順次郎が以前提起した四二〇年から五〇〇年の間の時代ではなく、三二〇年から四〇〇年のはずだとする仮説が提示された。⁽⁴¹⁾しかし、チベットの史料の研究に最初に着手した一人であるF・I・シチエルバツキーは、このような年代の確定は時期尚早であり、同名だが別人の「古ヴァスバンドゥ」、つまり中観

派（三世紀）の中心者だったアーリヤデーヴァの著作『百論』（Shata-shastra、百の論〔章〕⁽⁴²⁾）の註釈書を編んだ人物がここに関係している可能性が高いと考えた。

ヴァスバンドウ二人説

一九五〇年代以降の学界は、オーストリアの学者E・フラウヴァアルナーが提起した、いわゆる「ヴァスバンドウ二人説」争論の対象になった。フラウヴァアルナーは、漢文史料に示された年代を対比しながら、伝記の筋書きのなかで、二人の異なる人物つまり「古ヴァスバンドウ」と「新ヴァスバンドウ」に関する伝記が混ざっていると推察できるような年代差を明らかにした。⁽⁴³⁾ 彼は、二者のうち古ヴァスバンドウをアサングの弟で大乘仏教の布教者と判断し、彼の年代を三二〇年から三八〇年とした。

フラウヴァアルナーは、まさにこの人物をヤシヨミトラ〔Yasomitra 称友〕の『阿毘達磨俱舍論』⁽⁴⁴⁾への註釈の言及された「古ヴァスバンドウ」という人物と同一と認めるべきだと確信していた。また彼は、アサング

の影響によって大乘仏教へ転向したという伝記の筋書きに、この「古ヴァスバンドウ」が関係しているとした。フラウヴァアルナーによれば、「古ヴァスバンドウ」は、『百論』に対する註釈書や『十地経論』を含む、大乘仏教の数多くの論書や註釈書を著した。

彼は古ヴァスバンドウに関しては、その年代を四〇〇年から四八〇年代としている。この思想家は最初に『阿毘達磨俱舍論』を著述し、説一切有部の立場を堅持した。しかしその後、論書に対する自身の註釈に誤りのないことを経量部の視点から証明し、経量部の中で発展させていった。古ヴァスバンドウは、決して大乘仏教へ転向はしなかった。「ヴァスバンドウ二人説」は、多数の研究者の批判の対象となった。『阿毘達磨燈論』の公刊者であるインドの学者P・S・ジャイニは、年代の確定の問題を、アサングとの関係ではなく、『阿毘達磨俱舍論』の哲学的内容に訴えて判断を仰いだ。彼は、『阿毘達磨俱舍論』の中で経量部の視点で示された立場は大乘仏教にきわめて近いと指摘した。⁽⁴⁵⁾ 日本の研究者は、フラウヴァアルナーによる

漢文史料の分析方法を批判的に再検討し、「ヴァスバンドウ二人説」を全体として受け入れることはなかった。⁽⁴⁶⁾日本の仏教学研究においては、ヴァスバンドウ法師は一乗 (ekayāna) の提唱者として理解されている。

「ヴァスバンドウ二人説」の批判については、一九八〇年代初頭にスイスの研究者S・アナツカーが、中国とチベットの伝記の筋書きを焼き直しの著作を基礎として、ヴァスバンドウの哲学的実践の諸段階を再構築しようと試み出したことは注目すべき出来事である。⁽⁴⁷⁾アナツカーは、パラマールタや他のチベットの歴史家たちがヴァスバンドウについて言及するインドの国王や皇帝の史料を考慮しながら、ヴァスバンドウの年代を三二六年から三九六年と推定した。そして、カシミール国での彼の修学時代を三四二年から三四六年とした。アナツカーは、ヴァスバンドウが大乗仏教に転向した筋書きについて、『阿毘達磨俱舍論』を記述し、巡礼を行った後に、結果として起こった段階として簡潔に記している。⁽⁴⁸⁾

アナツカーの著作は、きわめて説得力ある論証を有

したにも関わらず、最終的には、「ヴァスバンドウ二人説」に対する論破につながらなかった。慣例に従いフラウヴァルナーのこの仮説は、ヴァスバンドウの(思想的)遺産を形成する論書について学術的な検証を促した。現代仏教学の世界的に知られた古典学者であるL・シュミットハウゼンは、『阿毘達磨俱舍論釈』の著者(であるヴァスバンドウ)が著した論書を検証するという最も難しい方法を課題目標として立てた。その検証対象の論書として、『阿毘達磨俱舍論』、『大乘成業論』、『縁起初分分別経論』(Pratyāsamupādayākyā)、『大乘五蘊論』(Pañcakandhaka)、『唯識二十論』と『唯識三十頌』を入れている。

シュミットハウゼンは、ヴァスバンドウによるいくつかの大乗仏教経典の註釈書や『三性論』の詩論が後世のテキストと見なしており、これらのテキストが、二人のヴァスバンドウに関する問題提起の正当性を証明していると考えた。⁽⁴⁹⁾

ヴァスバンドウの哲学的実践の諸段階についての学術的な理解にきわめて重要な貢献を果たしたが、

二〇〇五年に出版されたR・クリッツァーの研究書である『ヴァスバンドゥと「瑜伽師地論」』(Yashubandhu and Yogācārahūmi)である。『阿毘達磨俱舍論』における瑜伽行唯識派の要素を扱った本書は、本稿でもすでに何度も参照している。ここでは、サンガバドラが『阿毘達磨順正理論』のなかで『阿毘達磨俱舍論』を批判したときの論点が分析されている。クリッツァーは、ヴァスバンドゥ自身による註釈書の八つのそれぞれの章に見られるサンガバドラの反駁する論題は、『瑜伽師地論』に盛り込まれた理論的立場を更新したものであると示した。⁽³⁰⁾

このような、ヴァスバンドゥとマイトレーヤ、アサンガによる論書概念論的な関係性について根本から論証することで、ヴァスバンドゥが大乗仏教に転向したという伝記の筋書きに重大な修正がもたらされる。『阿毘達磨俱舍論』の著者(であるヴァスバンドゥ)は『瑜伽師地論』の詳細を知り、そしてあらゆる可能性から高く評価した。高僧ヴァスバンドゥは『阿毘達磨俱舍論』を註釈し、私たちが考えるように、カシミール

国の説一切有部から、ダルマの理解に新しい地平を開くような哲学的教義の道を創ろうとしたのである。

注

(1) 法(ダルマ、Dharma)とは、サンスクリット語での原義に即した仏教の名称。

(2) 十九世紀の仏教学における最重要の研究対象は、初期仏教、つまり南伝仏教の初期のパーリ語で書き残された経典であった。これらは、仏陀の教説の唯一信頼できる経典として研究されてきた。

(3) サンスクリット語の原本すべてが残されているわけではないが、現代の史学史家は、およそ三十のテキストがある程度の確信をもってヴァスバンドゥの遺作であると見なしている。

(4) 北部小乗(Śākyāyana、声聞乗とも)は、インドから中央アジアや東アジアに枝分かれして流布した仏教伝統。この分枝を形成するために部派がツールとして使っていた言語はサンスクリット語であった。

(5) 三藏(Trīpiṭaka、「三つの収蔵物」「三つの籠」の意)とは、北部小乗部派により記録された仏教の典籍の集大成である。しかし、この中の仏典のうち一つとして原本の形では残されていない。学者たちが保管しているのは、中国語とチベット語に翻訳されたサンスクリット経典の一部だが、それは何か単独の仏典から作

- 成されたものではない。また、大シルクロード領域のオアシスから出土した原本の写本の断片も保管されている。三蔵の第一部と第二部である「経蔵」（説法）と「律蔵」（宗教的戒律の規範）は、仏陀である釈迦牟尼により説かれた経句、つまり法（ダルマ）を収録している。第三部である「論蔵」（法を体系づけた論議・注釈）には、仏教の創始者である釈尊の弟子や信奉者、つまり声聞の十大弟子たちによってなされた七つの哲学的論考が含まれている。
- (6) 仏教哲学の論述様式をとった典籍「阿毘達磨（論蔵、Abhidhamma-dīpa）」では、歴史的には最初期の段階で、「経蔵」と「律蔵」の内容を、その解釈を通して内観している。総括的に「論蔵」の研究者により名付けられたこの哲学的思索の流れは、部派仏教の時代にさらに発展を遂げた。そのため仏典注釈の文献は、「論蔵」前後で区分されている。
- (7) アサンガとヴァスバンドウの血縁関係に関する相反する資料は、聖者伝説の性質を持つ。
- (8) 説一切有部の歴史に関しては、Bhikhu Kuala Lumpur Dharmajoti (2005: 55-61) を参照。
- (9) テクストは漢訳で保管されていた。
- (10) 「譬喩者」とは、「明瞭な実例に立脚している」人々のこと。
- (11) Cox (1995: 39) を参照。
- (12) 当該議論の概要は、Kritzer (2005: XXVI-XXX) を参照。
- (13) 経量部の概念の拡大解釈をした論書の中の仮定については、Bayer (2010: XXVII) が意見を述べている。経量部の思想的伝統に関しては、Singh (2007) を参照。
- (14) アサンガの師に関しては、Keenan (1992) を参照。
- (15) パラマルタは西インド出身の氏族であった。若いときから、カシミール国、ガンダーラ国、その他の伝統的学問の中心地へいわゆる遊学をし、さまざまな師の指導の下で仏教経典を学んだ。また彼は、仏教と対立する正統ブラフマニズムの思想体系にも精通していた。五四六年から中国で仏教経典の翻訳に従事した。彼により翻訳・著述された大部分が、瑜伽行派の論書によって構成されている。詳細については、Jenkov (2006: 54-9) を参照。
- (16) 玄奘は、論蔵（阿毘達磨）の思潮や瑜伽行派の伝統的な仏教哲学文献のすぐれた訳経僧である。中国で唯識派を発展させた法相宗 (Faxingzong 唯識宗) の開祖である。大シルクロードの天山北路を辿り、インドへの遊学を果たした。これについては、Jenkov (2006: 54-70) を参照。
- (17) この著述は、アカデミー会員F・I・シチュエルバツキーの弟子であるロシアの学者E・E・オベルミラーにより初めてチベット語からヨーロッパ言語（英語）へ翻訳され、一九三二年にハイデルベルクで出版された。この著作の第三版 (Buston Rin-chen-grub 1999) を参照。

- (18) 論文のヨーロッパ言語（ロシア語）への最初の翻訳は、アカデミー会員のV・P・ワシリーエフが遂行した。ターラナータの『インド仏教史』(Japahara 1869)を参照。本稿では、Taramāha (2010) の引用を使用。
- (19) Takakusu (1904: 169-196).
- (20) Takakusu (1905: 33-53).
- (21) 氏族とは、父系の血縁により成員が繋がっている大家族のこと。
- (22) プローヒタは、ヴェーダ時代に、部族の平穏な暮らしと戦での常勝の保障をする使命を帯びたための儀式の執行に対し責任を担う祭司。初期中世には、独占的な宗教的権威を持っていた宮廷の祭司であり、その後は家族あるいは氏族の司祭となった。
- (23) ヴィンドヤヴァーシンは、その名の人物の居住地がヒンドゥスターン北東のヴィンディヤ (Vindhya) 山脈にあることを示している。
- (24) 『サーンキヤ論(教論学)』とその著者に関しては、Shlokin (1995: 41-44) を参照。『サーンキヤ論(教論学)』のテキストは永久に失われたと考えられていた。彼らの中で用いられていた修行方法は以下の三点である。つまり、聴聞、知覚されたことに対する理性的な思索、得られた知識を実践的に消化するための観照である。
- (26) 『人菩薩行論』では、仏陀の教えに対する註釈法について二分法的対比が行われている。つまり、現実
- (27) インドで形成された仏教の観念によれば、経典や論書の聴聞は、最高の真理を直接判断する洞察力という精神状態を散発的に出現させるように促す。
- (28) 仏陀と菩薩に具わっている智慧の完成に関する大乘仏教の経典の論は以下の通り。史学史家たちが考えているように、般若波羅蜜多 (Prajñāpāramitā) の最古の断片は初期の正統な経典と時代が相関している。般若波羅蜜多の救済論的な見解の中に、執着の束縛から自由かつ完全に独立した包括的認識がある。
- (29) 現代の研究者の多くは、ヴァスバンドゥのもとでデイグナーガが直接修業したという事実を疑う傾向にある。しかし、真実を認識するための根源に関するデイグナーガの教義の出発点は、ヴァスバンドゥの『論式』(Vādaividhāna) (『公開討論の規則』) の論理的理念であった。
- (30) Hsuan-tsang (1906: 105) を参照。
- (31) 同三二五頁を参照。

- (32) カシミールでの玄奘の滞在については Hazra (2011: 12-13) を参照。
- (33) 『瑜伽師地論』の完全な原本の入手が、玄奘の旅の計画の目標の一つであった。この点に関しての詳細は Jelenov (2006: 69) を参照。
- (34) 玄奘により立案された翻訳法については、Jelenov (2006: 72-73) を参照。
- (35) とくに Pu-K'awang (1960: 363) を参照。
- (36) 世親の阿毘達磨論の翻訳は、八世紀にチベットの訳経僧グループがインドの学者ジナミトラ [Jinamitra] と協力して行った。
- (37) Bu-ston Rin-chen-grub (1999: 137) を参照。
- (38) Tāranātha (2010: 167) を参照。
- (39) 同一七〇一七二頁を参照。
- (40) 当時の学者たちの関心は、『阿毘達磨俱舍論本頌』と『阿毘達磨俱舍論』の中国語やチベット語訳テキストト、また経量部のヤシヨミトラ (Yasomitra 称友八世紀) による唯一のサンスクリット語の注釈である『阿毘達磨俱舍論明瞭義釈破我品』 (Abhidhamakośa-sphuṭārthabhidhar makōśavyākhyā) にのみ向けられた。プロジェクト研究に参加したのは、ロシアからは F. I. シチュエルバツキーと彼の弟子である O. O. ローゼンベルグ、フランス・ベルギーの仏教学派の学者である S. レヴィとルイ・ドゥ・ラ・バレ・プサン (Louis de La Vallée Poussin)、日本のサンスクリット学
- 者であり史料研究者である萩原雲来であった。上記すべてのテキストの出版と、全テキストのヨーロッパ言語への翻訳の遂行、阿毘達磨の哲学の諸問題に関する研究の準備が計画された。この作業の経過とその成果は Epakova (2012: 22-44) を参照。『阿毘達磨俱舍論』と『阿毘達磨俱舍論釈』のサンスクリット語の原本は、一九三五年にチベットのシガツェ市の南方二〇キロにあった小さなゴル (Gol) 僧院でラーフラ・サーンクリテイヤーヤナにより発見された。
- (41) Peri (1911: 355-382) を参照。
- (42) Il'eparcovii (1988: 84-85) を参照。
- (43) Frauwallner (1951: 3-5) を参照。
- (44) 同一二一二頁を参照。
- (45) とくに Jaini (1958: 48-53, 1959: 236-249) を参照。
- (46) 日本人研究者たちの反証の叙述については、Kritzer (2005: XXXV) を参照。
- (47) 『ヴァスバンドウ——彼の生涯と時代』という概論形式の中で行われたこの再構成は、Anacker (1984) に取められている。この書はいくつかの修正を施し、二〇〇五年と二〇一三年の二回にわたり再版された。
- (48) 同一八一二〇を参照。
- (49) Schmithausen (1987: 262-263)。
- (50) 研究の方法論と結果の叙述は、Kritzer (2005: XXI-XXXVI) を参照。

参考文献

- Дарпаната. 1869. *История буддизма в Индии* / Пер. с тиб. В. Васильева СПб. (ターラナータ『インド仏教史』V・ワシリーエフ訳、サンクトペテルブルク、一八六九年)
- Ермакова, Т.В. 2012. *Японские ученые — участники научно-издательских проектов Санкт-петербургской буддологической школы // Пять веков востоковедения чтения памяти О.О. Розенберга. Труды участников конференции.* СПб. (T・V・エルムゴロフ「サンクトペテルブルク仏教学派の学術出版プロジェクトの参加者である日本の学者たち」『O・O・ローゼンベルク記念第五回東洋学講座』サンクトペテルブルク、二〇一二年)
- Денков, П.Д. 2006. *Философия сознания в Китае. Буддийская школа фацзи (вэйцзи).* СПб. (P・D・Ленков『中国における意識の哲学。法相宗(唯識宗)の仏教学派』サンクトペテルブルク、二〇〇六年)
- Шохин, В.К. (Издание полгот.) 1995. *Душный свет санкхьи* М. (V・K・Шойхин編『サーンキヤ学派の月光』モスクワ、一九九五年)
- Шербатской, Ф.И. 1988. *Избранные Труды по буддизму.* М. (F・I・Шичелерпатский『仏教選集』モスクワ、一九八八年)
- Anacker, S. 2013 (1984). *Seven Works of Vasubandhu. The Buddhist Psychological Doctor.* Delhi: Motilal Banarsidass.
- Bayer, A. 2010. *The Theory of Karma in the Abhidharmasamuccaya* (Studia Philologica Buddhica: Monograph Series: XXVII). Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies. Bhikhu Kuala Lumpur
- Bodhisattva Asadga. 1992. *The Summary of the Great Vehicle.* Translated by John P. Keenan. Berkeley: BDK America.
- Bu-sion Rin-chen-grub. 1999. *The History of Buddhism in India and Tibet* (Bibliotheca Indo-Buddhica. No.26). Translated by E. Obermiller. Delhi: Sri Satguru Publications.
- Cox, C. 1995. *Disputed Dharmas: Early Buddhist Theories on Existence: An Annotated Translation of the Section of Factors Dissociated from Thought from Saṅghabhadra's Nyāyānusāra* (Studia Philologica Buddhica: Monograph Series. XI). Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies.
- Dhammajoti, Bhikhu Kuala Lumpur. 2005. *Sarvāstivāda Abhidharma.* Hong Kong: Centre of Buddhist Studies, The University of Hong Kong.
- Frauwaller, E. 1951. *On the Date of the Buddhist Master of the Law Vasubandhu* (Serie Orientale Roma. 3). Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.
- Harza, K. L. 2011. *Buddhism in India as Described by the Chinese*

- Pilgrims. AD 399–689*. New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers.
- Hsuan-tsang. 1906. *Records of the Western Kingdoms*. Translated by S. Beal. L.
- Jani, P. S. 1958. "On the Theory of Two Vasubandhu." *Bulletin of School of Oriental and African Studies* 21 (1): 48–53.
- _____. 1959. "The Sautrāntika Theory of Bija." *Bulletin of School of Oriental and African Studies* 22 (2): 236–249.
- Krizer, R. 2005. *Vasubandhu and the Yogācārabhūmi: Yogācāra Elements in the Abhidharmakośabhāṣya* (Studia Philologica Buddhica: Monograph Series, XVIII). Tokyo: International Institute for Buddhist Studies.
- P'u-K'uang. 1960. "Kōśa Commentary." quoted by Sakurabe, In *Abhidharmāvatāra by an Unidentified Author* Vol. II. Nalanda: Nava Nalanda Mahāvira Research Institute: 363.
- Peri, N. 1911. "A propos de la date de Vasubandhu." *Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient* 11: 355–382.
- Schmithausen, L. 1987. *Āyavyūhāna: On the Origin and the Early Development of a Central Concept of Yogācāra Philosophy* (Studia Philologica Buddhica: Monograph Series, IV). Tokyo: International Institute for Buddhist Studies.
- Singh, A. 2007. *The Sautrāntika Analytical Philosophy*. Delhi: Eastern Book Linkers.
- Takakusu, J. 1904. "The Life of Vasubandhu by Paramārtha." *Young Pao* 5: 269–296.
- _____. 1905. "A Study of Paramārtha's Life of Vasubandhu and the Date of Vasubandhu." *Journal of the Royal Asiatic Society* 37 (1): 33–53.
- Taranātha. 2010. *Taranātha's History of Buddhism in India*, trans., from Tibetan by Lama Chimpa & Alaka Chatopadhyaya, ed., by Debprasad Chatopadhyaya. Delhi: Motilal Banarsidass Publishers.
- (Elena Petrovna Ostrovskaya /
ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所南アジア部長)
(訳・オムス / ヨウシロ / 東洋哲学研究所委嘱研究員、
法政大学非常勤講師)